

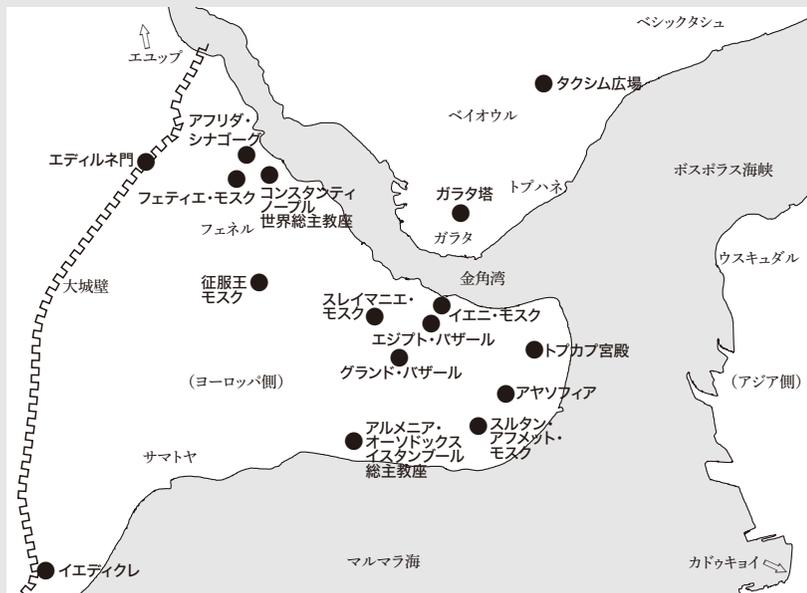
内容

- 22 ボスポラス海峡 征服王メフメット二世の再建
- 23 フェネルリギリシア人貴族の町
- 24 イスタンブール 改宗者たちの活躍
- 25 エユツプ 正統イスラム教国家へ
- 26 七つの丘 壮麗王スレイマン一世の栄華
- 27 トプカプ宮殿 ハレムが起こした乱世

歴史年表

- 一五世紀 「大航海時代」(一七世紀前半)
- 一四八一年 メフメット二世死去
- 一四九二年 レコンキスタ完了、セファルディムの受け入れ

- 一五一七年 聖地メッカとメディナの領有
- 一五二〇年頃 「女性たちの王朝」(一六五一年)
- 一五二九年 第一次ウィーン包圍
- 一五三五年頃 カピチュレレーション開始
- 一五三八年 プレヴェエザの戦い
- 一五七一年 レパントの戦い
- 一六五六年 宰相キョプリュリュの改革開始
- 一六八三年 第二次ウィーン包圍
- 一六九九年 カロロヴィッツ条約
- 一七一八年 西欧への初の領土割譲
- 「チューリップ時代」(一七三〇年)
- 一八二二年 ギリシア独立蜂起(一八三〇年独立)
- 一八二六年 イエニチエリ廃止
- 一八三〇年代 エジプト半独立



フェナリ・イサ・モスク (コンスタンティン・リプシス教会)

22 ボスポラス海峡 征服王メフメット二世の再建



新ローマ皇帝、第二のアレクサンダー

「エイス・ティン・ボリン」。「その街では」を意味するギリシア語だ。これが、コンスタンティノール陥落後、街の新しい名前として広まった「イスタンブール」の語源である。コンスタンティノール周辺では陥落のずっと前から、ビザンツ人、オスマン軍、異邦人を問わずさまざまな人々が、ギリシア語で「その街では」と言って、城塞都市の中での様子をしきりに噂していたのだろう。オスマン軍はそれを情報源にし、作戦を立てる。あまりに日々「その街では」と語られたため、これが「街」の陥落後、そのまま名前になったようだ。

ところで、コンスタンティノールの名前は陥落の日を境に消え、イスタンブールに変わったと思われる。これは間違いで、コンスタンティノールの名前は消えていない。ただし、キリスト教の言語であるギリシア語で「コンスタンティノポリス」であったため、そのままでは公式に使えなかった。イスラム教徒の立場からの呼び名とするため、昔からアラブ人がアラビア語訛りで言って

いた「コンスタンティニヤ」を借用したのだ。イスタンブールの名前があとから自然発生し、定着しても、コンスタンティニヤはずっと併用された。

それには理由がある。イスラム教のオスマン帝国は、キリスト教のビザンツ帝国に代わる「新ローマ帝国」として、由緒ある名前を守るのだ。そしてメフメット二世は「新ローマ皇帝」だった。これが、彼が「カイゼリ・ルム(ローマ皇帝)」を名乗った理由の一つだ。

彼はオスマン軍から「ファーティヒ(征服王)」と讃えられた。ペルシア王の使った称号で「パルディ・シャー(最も偉大なる支配者)」とも呼ばれている。メフメット二世が意識したのは、一八〇〇年前ペルシアを倒して東方世界の盟主となり、「アジアの王」を名乗った同じトラキア出身の若者のはずだ。なぜならその人物は、スルタンがコンスタンティノール征服を果たしたのと同じ二三歳で、壮大な東方世界の盟主になる道をつけるアナトリア征服を果たした。古代マケドニア王国のアレクサンダー大王である。なお「スルタン」は、イスラム教社会の世俗君主を意味する(アラビア語)。

コンスタンティノールの救済者

では、コンスタンティノール陥落の翌朝、メフメット二世がいよいよカイゼリ・ルムになったのをどう実感したかを探ってみよう。初めて城塞都市内に入城した彼は、都大路メセを東へと進む道中、左右に次々と、歴代ローマ皇帝ゆかりの場所を見たことになる。現在のバス通り(フェヴズイ・パシャ通